

市野々・下叶水の民俗文化について

年中行事班 佐藤ありか 徳岳梨沙 渡部美佳 安部暁彦
伝承工芸班 齋藤 陽 安部成美 渡部拓也

1. テーマ設定の理由

昨年度「小国町を中心とした年中行事」をテーマに現 2 年生は取り組みました。「詳しく調べられなかった」との反省を踏まえ、今年はその内容を引き継ぎながらも地区範囲を狭めて、特定の地区にスポットを当てその背景も探してみたいと考えました。

調べる地区の選定：平成 2 年に建設着手（本体工事より 5 年）され横川ダムが小国町綱木箱の口に完成しました。またその一方でダム建設に伴い水没し廃村となった村があります。市野々と下叶水です。今回は、越後街道（13 峠）の宿場でもあったこの場所に着目し探っていきたいと思います。

2. 調査の概要

（1）歴史的背景

①市野々と下叶水の関連の深いもの

（2）年中行事

（3）伝承工芸

（4）現地巡り

3. 調査の結果

（1）市野々の歴史的背景について

横川ダムに沈んだ市野々・下叶水の地、その背景を調べる為、今年 4 月 18 日にオープンした横川ダム広報交流施設「きてくろ館」に見学に行きました。そこで横川ダム管理事務所の高橋さんにお話を伺いました。

市野々の村は越後街道に沿って部落が並び、稲作が中心であった。土地に限りがあったため田が無くなることを心配し民家は増やせず、よって人口も増えなかった。市野々には 22 戸の部落があり、人口は 90～100 人くらい、宿屋を行っていたが、本職だったわけではなかった。蚕をやっていた家などがあつたが生活は質素であった。江戸時代後期、交通量が多くなり、昭和 30 年 2 戸増えて全部で部落は 24 戸になった。

①市野々と下叶水の関連の深いもの

参考：きてくろ館「ふるさとへの想い（DVD）」

i. 横川ダム

昭和 42 年に発生した羽越水害を契機に災害の未然防止と発電等を目的とした施設。

ii. 飛泉寺

楠木正成の四男、正勝が建てた。出生（いずるぎ）の滝と呼ばれた滝があり、その滝が一番きれいに見えるところに飛泉寺を建てましたが、その後不幸にも 2 回の火事に見舞われた。田から焼けた地蔵様が出てきたそうで、その後復元され現在はさらに巻いて東原にある。

iii. 大銀杏の木

市野々を見守り続けてきた、市野々部落のシンボルであった大銀杏の木は、住民の人たちの願いで水没を避ける為、高台に移動した。飛泉寺を建てた正勝が、銀杏の木の枝を杖にしている、それを土にさしたところ芽が出て、立派な大木になった。とされている。

iv. 石碑

市野々には、医者がないので、石碑に祈ったそうです。横川の谷間から参詣に出向く者もあったそうですが、石碑を通じて気持ちは常に身近なところに置きたかったものと思われます。その他、旅人が多いことで道中の安全も祈願していた。

v. 済広寺（さいこうじ）

江戸時代初期の慶長年間(1596～1615)に米沢高岩寺の末寺として建てられ、市野々の飛泉寺とも関わりが深い。安置されている本尊阿弥陀如来巫像は、平安末期から鎌倉時代にかけての名作で、小国地域最古の貴重な文化遺産となっている。

下叶水では、本尊を見ると盲目になると言い伝えられていたため、その姿を拝見した人はほとんどいなかった。現在は下叶水の後方山手に移転新築されている。

vi. 黒沢峠

黒沢峠は市野々に越えるための主な道の一つでした。安永4年(1775)の「伊佐領、市野々海(街)道一件留帳」によれば、小国郷の中心小国宿より白子沢、沼沢方面への道は、3箇所あったそうです。

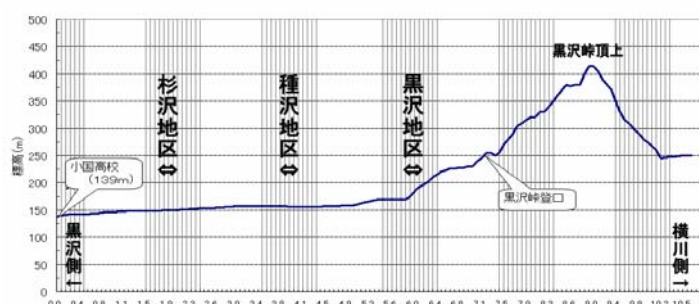
- ・伊佐領から箱ノ口、綱木を天難場から白子沢へと越える道
- ・伊佐領から箱ノ口・千野を経て市野々、桜峠越えに白子沢へ通ずる道
- ・小国から黒沢村、黒沢峠越えに市野々、桜峠、白子沢へと通ずる道

綱木から天難場を越える道は雪崩が多くあり、千野経由の遠回りとなるため、黒沢峠越えの道が次第にとられるようになった。

イギリスの旅行家イザベラバード女史が、この越後街道を下越方面から置賜盆地へと通過した際の彼女は、著書「日本奥地紀行」の中で、黒沢峠周辺の村やそこを通過する人々の様子を次のように綴っている。

【以下一部：男子の夏の服装はマロだけである。女子の服装はズボンをはき、胸を広げたシャツを着ている。昨夜黒沢に着いてみるとズボンだけに縮小していた。荷物の大半は牛や人夫が運んでくる。男と同様に女も重い荷物を運ぶ。この連中がかわいそうに大弱りの格好で喘ぎながら登ってくるのを見ると、気持ちが悪くなるほどである。】

これらの記述は百数十年前にもかかわらず、寒村の人々の生活がいかに過酷なものであったかがわかります。現在は峠道の散策を楽しめる黒沢峠まつりが毎年10月実施され賑わいをみせ、往時を偲びながら自然や歴史の理解を深める事ができる場所となっています。



(2) 市野々・下叶水の主な年中行事

①季節ごとに行事をまとめる。(月日は新暦に統一しています。)

市野々・下叶水歴史保存会 副会長 渡部錬太郎さんにお話を伺いました。

春	5月5日 さなぶり	・ほうの葉に、にまめとあられを包んだものを、(田植えも無事に終わりました)という意味を込め神棚にお供えしました。 ※田植えの終わったあと村の頭に代表者が休みをもらいに言いに行き村中で2日くらいの休みをもらいました。
	※「触休み」ふれやすみと呼ばれ、仕事が一段落したときなど休みを決め村中に触れを出すもので、半夏、風祭日、神送日など年中行事を伴う日もこれに含まれていた。条文も存在し7項目にわたる。その中には「触休み日に於いての自由労働は他村に限る。」など厳しく制限されており、違反したものには「7条・科料として清酒10杯、鯨(にしん) 壺束を買う。」といった罰則が与えられた。集団として村を維持していくにはこうした厳しさも時には必要であったのではないかと思います。	
	3月中旬 木出し	農作業の最初の仕事「堆肥運び」よりも、一足早くに行う「木出し」。各戸の囲炉裏やかまどで使う一年分の焚き木を部落ごとにみんなで協力して、国有林から払い下げられた山に切り出しに行き、雪の上をソリですべらせて運搬してくる仕事。この時小昼飯(こじはん)に草餅(こじはん餅)を食べました。
	山の「木分け」から始まり、「木切り」、運搬用の「道づくり」、山から木置場への運搬、さらにそこから各家まで運び、木を割って屋根裏の「ちし」に積み上げるまで約1ヶ月間。「木出しに行くか、鉈で頭を削られるか、どっちが良いか」と例えられるほど重労働で、大急ぎで片づけなければならないという大仕事。15歳で一人前として扱われるようになった男子は、これが部落の初めての共同作業になる為、家族は皆に挨拶してまわった。協力し助け合うことで連帯感も増し、互いの絆づくりにも大切な意義を持っていた仕事。昭和30年代半ば、石炭や石油・ガスの普及とともに、この仕事も徐々に行われなくなり、焚き木は薪として利用される程度になりました。	
夏	3月下旬 4月上旬 「肥引き」	昔はほとんどの家で牛を飼っていた。1年間かけて、堆肥を作り田んぼの雪が1メートルぐらいになったら、ソリで引いて運んだ。肥引きが終わる頃には、雪もなくなって農作業に移った。
	8月13日 「墓参り」	お精霊棚を作り、盆花を飾り、柁にはススキ、ハギを立て、野菜をお供えします。早めに夕食を食べ、風呂に入って身を清めたあと、新しい盆下駄(げた)盆浴衣を着て、こうず・だんご・花・線香・提灯を持ってお参りをしました。送り地蔵に団子と線香を、お墓にはこうずに団子をお供えし、「オノガラ」で迎え火を焚き、帰る途中に家主はお地蔵さまにまわりお参りします。帰るとまた、「オノガラ」で迎え火を焚きました。
	8月14日 「お盆礼」	朝は餅をつき、「ハスの葉」に盛って仏さまに備え嫁は実家にお盆礼に行きました。
	8月15日 「お仏たて」	夕方、団子や果物を持って、お墓へ行き先祖を送りました。
	8月15日 8月18日 盆踊り (下叶水)	夏の最大行事と言われている盆踊りは済広寺前庭で行われました。 あの世から帰ってくる祖先をお迎えする準備に始まり、祖先をお送りするまで行事が続きます。盆に亡くなった祖先も今生きている人も、大人も子供も共に過ごす機会とされていました。

夏	8月16日 「百万遍」	お寺に行って、重箱に、漬物やおひたしなどの食べ物を各個人それぞれ持ち寄って、お寺の和尚様にお経をあげてもらいます。その時、木で作った数珠を皆で回して、阿弥陀（あみだ）の名号（みょうごう）を百万回唱えます。火災が起きないように。村の人々が健康で暮らせるように。作物が豊作であるように。など、さまざまなことをお祈りしたそうです。（下叶水の場合）
	なぜ百万遍が始まったのか？ 下叶水に家が16戸あったとき、火災が起きて、3戸しか残らず全部焼けてしまいました。川をはさんで、東側と西側に同じくらいの戸数がありました。ある時、東側のある家が火元になって火災が起き、川を越えて西側の家にも移り、残った家は3戸だけで、あとは全部焼けてしまったそうです。次からは、こんな事が起きないようにと願って百万遍を行ったのが始まりとされています。	
秋	8月17日 「盆踊り」 (市野々)	一戸一名が出て、午後から盆踊りの準備をします。帰省者や近隣部落からも大勢参加し、先祖の供養と豊作を祈り、笛・太鼓・歌によって夜遅くまで踊りました。
	8月18日 「神楽舞い」	市野々の飛泉寺で行っていました。小頭が先になり、若衆数人で神楽舞いを踊り、各家を廻り、寄付やお米等をもらいました。神楽に頭をかんでもらうと、頭やみ（頭痛）をしないとされていました。
	8月21日 「神送り」	和尚様が拝んでくれたお札を、木にはさんで、「お盆の神おくるわー」と言いながら、村外れまでお札を立てて、お盆の神様をおくりました。
	「虫おくり」	畑の野菜や米に虫がつくと、いいものが採れなくなるので、小中学校の子供と、部落の若衆が参加し、夜やなぎの枝に「虫おくり」の札をつけ提灯を持ち、部落の上からホラ貝を吹き「虫おくるわー」と唱え村はずれまで送りました。
	9月15日 「秋祭り」	（市野々） 熊野神社と金毘羅さまのお祭り、神主を呼んでご祈祷をしてもらい、回り番の宿で酒を飲んだ。もちをついて、神さまに供えました。
	9月18日 「秋祭り」	（下叶水）石動神社と鎮守さまのお祭り、市野々と同じ事をしました。
	10月16日 お田の神さま	※ 冬の2月16日と同じ行事をしました。 大きな団子を16個作り、ザルに入れ、お田の神さまに備えました。 （この日から田の神が山の神に変わりました。）
冬	12月30日 「歳徳神」	歳徳神さまにお神酒と「おみだま」納豆、わらび漬けをお供えしました。 月数（通常は12個、閏年は13個）のご飯を握ったものに萩の箸を立て五升マスに載せました。
	1月15日 「野のはじめ」 「とりおい」 「雪中田植え (さづき)」	豆がら、ワラ、おのがらを束ねた苗を12束（月の数で閏年は13束）作り 「野のはじめ」で堆肥を撒いた雪の上に田型を作り植えました。 （市野々は15日、下叶水は14日の夕方に行いました。） 「とりおい」とは朝早く子供がさづきのところへ行って、鳥がこないように追い出しました。
	2月16日 お田の神さま	大きな団子（田の神だんご）を16個作り、ザルに入れ、お田の神さまに備えました。（この日から山の神が田の神に変わりました。）

その他、「契約」という行事もありました。

宿元の当番に当たっている家にメンバーが集まり、前年度と翌年度の部落の様々なテーマについて協議・決定した。

参考：「置賜の庶民生活(三)・人の一生」 「ふるさとへの想ひー市野々・下叶水ー」より

市野々の「契約」	出席者は1戸1人で、各家の戸主かその長男のどちらかが正式な参加資格を認められていた。総戸数は41戸だったが7戸は「よそ者」（比較的新しく移住してきたり永住ではなく短期間だけ移住している人々）として、契約には加われなかった。また非農家もメンバーに含まれず農家の29戸のうち3戸は、いずれも分家ということで参加資格を認められなかった。つまり村の決め事や財産に関わり得る「村にとって一人前の家」と認められたメンバーだけによって構成されていた。
下叶水の「契約」	昭和の戦争前まで、下叶水には「契約組」という組織があった。地区に分ける隣組のようなものではなく、いわば契約上の義理の「親戚」のようなものだった。年に1度の「契約」になると、当番に当たっている宿元と契約組の人々が、前の日からご馳走を作って準備した。1日目に決め事、2日目に飲み会と、2日に渡って行ったこともあった。
小国の若衆契約は「若連中契約」と呼ばれ、長男・次男の別なく15歳になると加入し、新暦の12月31日に1年の契約が行われる。各人が酒・肴を持参し新たに15歳になった者は加入の挨拶をする。退会は自分の長男が15歳になった年であるから、子どものいない場合などは60歳ぐらいまで顔を出すことになっていた。若連中の代表を若衆頭と呼び、その下に副若衆頭を置き、今年加入した者は小若衆として小走り役を勤めることになっていた。人足の仕事は作業道づくり、道普譜、馬道なおし、草刈の他に「川狩り」と称してや鱒や鮎を取ることを共同の仕事として行ったり、兔とり、天気祭り、神送り、ねずみ送り、虫送りなどを相談し合う若連中の楽しみでもある鎮守の祭礼（山の神）もあり芸人が来たときには若連中として、宿を引き受けることにもなっていたそうです。 昭和35年に津川村が小国町と合併した頃から大きく変わり、所有していた部落の契約山など、共同財産を背景とする従来のような「契約」は余り意味がなくなり。昭和36年の契約で、それまでのやり方での契約を廃止することが決まり、新しい契約に移り変わった。大宮講と山の神講も新契約に合併されたため、メンバーは全戸加入、会場は宿元ではなく公民館や分校で、女性の参加も認められ、戸主と妻が構成員になり、宴会の費用も全戸均等負担で、料理内容も自由となった。	

②まとめ

今は、携帯電話やテレビなどを通して簡単に情報を手に入れることができますが、情報を手に入れる手段が限られていた昔の人々は、部落のみんなが集まる行事は、ひとつのコミュニケーションの場としての役割も担っていたのではないかと思います。

部落の人たちは、1年間の行事を伝統として皆で協力し大事に受け継いできた事がわかりました。私の住んでいる地域では、市野々・下叶水のように行事ごとに集まって何かをする、などということはありません。現代の生活スタイル（仕事や休日）が変わったのが原因と言われていますが、身近な行事も月日が過ぎていくごとに、少なくなっているともお聞きますし、とても残念な感じを受けます。しかしそんな中でも皆が一同に集まり何かを行うということはとても大切だと感じます。また、調べていくほどに市野々・下叶水の人々は行事がある度ご先祖様のことを想い、大切に敬っているということがよくわかりました。このように、年中行事1つとっても様々な様相があることが伺え民俗の世界は奥が深いと感じました。

(3) 市野々・下叶水の伝承工芸

①伝承工芸品を調べる

横川ダム管理事務所高橋さんにお話を伺いました。

市野々・下叶水は宿場といっても特に目立った特産物や工芸品は無いとのことでした。手がかりがないまま調べていくと、実は市野々は荷物を運ぶ中継地になっていた。ということが分かり、そこから牛に関する物を調べていきました。

(佐藤 治助著「村の暮らしと藁」より)

【牛は稲作農家にとって家族同様の存在でした。堆肥作りも大切な役目の一つでしたが、なんといってもその労働力は貴重で偉大であった。鋤で一株耕した時代に比べれば飛躍的に作業能率をあげた。(代掻き・稲揚げ・堆肥運搬など)】

再び東原にお住まいの渡部錬太郎さんにお話を伺いました。

- ・牛は農耕の際は重要な労働力としていました。そんな牛達はとても大事に扱われ、同じ屋根の下に飼い（玄関から入るとすぐ牛小屋がある）まさに生活共同体だったといえます。
 - ・働き者の牛の食べ物や健康にはとても気をつけていたそうです。
 - ・エサはくず米や、わらを刻んだものなどで獣医は小国に2人いたそうです。
 - ・牛が年老いてくると、冬に多くエサを与え太らせ、春に若い牛数頭を引き連れてやってくる「ばくろ」と呼ばれる方と交渉し、新しい牛とお金に交換していました。
 - ・黒沢峠を通る際は、足の負担軽減・スリップ防止の為に藁（わら）で編んだわらじを前足に履かせていた。ことがわかりました。
- 「牛のわらじ？」そこから稲作が中心である市野々で他に藁を使った生活用具を探ってみました。

②「わら細工」について調べる

小国町の国道沿いにある道の駅に「わら細工」が売られている事を聞きました。見学の後、店の方に製作者をお聞きしたところ市野沢にお住まいの島貫一雄さんということが分かりました。その後、連絡を取り島貫さんの自宅へお話を伺いに行きました。

- ・当時は蓑（みの）や草鞋（わらじ）等をその家で使用する1年分を製作していました。
- ・農閑期の冬仕事に男性が製作し来季に備える。（縄ないは女性がやっていたりもした）というライフスタイルが確立していた。
- ・夏は、「わらじ」を履き、冬は、草鞋よりも足の露出が少ないスニーカーのような「じんべ」というものを履いていた。また田仕事には「わらじ」、山仕事には「しんべ」と履き分けていた。

(わらじ)・・島貫さんは山で木を切り田畑で炭にし、その炭を町で売るために牛で運んでいました。当時整備のされていない道を長距離歩くその牛の足を気遣ってわらじを作り履かせていたそうです。どの家でも農作業で働く牛に施していましたが、その後、道が良くなりその必要もなくなり作る機会がなくなりました。今ではこの「牛のわらじ」を作ることができる方は島貫さん始め数少なくなり、現在作っている人はいないそうです。

(じんべ)・・島貫さんもお父さんから見よう見まねで教わったそうです。昔はどこの家でも実用品として作っていましたが今は主に観賞用になりました。その他地区でも同じようなものは作られていますが、作業工程や名前には違いがあるそうです。

③じんべ制作（観賞用・工芸品となった事を踏まえて「制作」と表記）

作業工程

通常は稲刈り後（その年）の藁を使用しますが、今回は一年越しの藁を使用しました。

（藁の長さ（丈）がないものは「じんべ」の甲まで編むことができない）

I 藁を叩き柔軟性を出す。（履き心地をよくするために。藁づくりが一番重要）

II 縄を編み「こくり」という道具で藁（わら）をしごいていく。

III 底を作製

（水などが入らないように藁を編み、丈夫に作っていく。）

IV 足の型にはめる

V つま先の部分を作製

VI 足の甲の部分の編む

VII かかとの部分を編む

VIII 火に通し余分な藁を除く



作業工程

④作成したじんべを文化祭で展示し、調査する。

見学に訪れた方に、話を聞き他地区との比較（形や工程、名前等）をしようとしたのですが、文化祭への来校者が少なく、参考になる意見は得られませんでした。

⑤撮ったビデオと写真を編集してDVDを制作

制作風景を記録し映像として残しておけるようにと、ビデオカメラ

・デジタルカメラで撮影した「じんべ制作」の工程を記録し、

パソコンで編集したものをDVDとビデオテープに保存しました。



⑥まとめ

当時の人は稲藁でさえ捨てることなく、牛の肥料やじんべや草鞋といった物に利用していました。「もったいない」という意識を絶えず持ち、生活していたことがわかります。それは常に自然に対して感謝の気持ちがあったからできる事だと思います。自然界から受ける恩恵は生活の基盤をも左右しかねないものであることを知っていたため、自然に対しては常に敬意をはらいローインパクトを心がけていたのではないのでしょうか。

また、じんべ作りは、初めての私達にとってとても難しく、手助けをしてもらいながらようやく完成することが出来ました。見て学ぶということが伝承の特徴とお聞きしましたが、特に「じんべ」や「わらじ」は当時、実用品であったからこそ、必死に覚えられたのかかもしれないと思いました。実用品でなくなった現在では伝えていくのが難しくなっていたと言われていた島貫さんの言葉が少し寂しく感じました。そこで我々に何か出来ないものかと考え、制作風景を記録し残しておくことができればと思い、じんべ制作を20分間にまとめたDVDを作成するにいたりしました。完成したDVDは島貫さんにプレゼントしました。大変感動し喜んで頂きました。しかしビデオ編集に時間をとられてしまい、当初予定していた他地区との比較はできませんでした。しかし伝承とは人との触れ合いによって受け継がれてきた事と考えれば、島貫さんにお話を伺い喜んで頂くまでのその過程も、実は伝承文化の手段の一つだったのかも知れないと思いました。



(4) 現地巡り

① 現地を歩く

当時は小国から市野々に行くには徒歩か牛・馬で峠を越えました。私達も実際に当時の旅人の気持ちを知ってみたいと思い、各班目的を持ち全員で歩いてみました。

- ・ 年中行事班：信仰の中心となっていた飛泉寺。その大銀杏の木と新設された飛泉寺を見学する。
- ・ 伝承工芸班：作成したじんべ・わらじを実際に履いて峠を歩く。

白い森案内人：三須一郎さんに案内・説明をしていただきました。

2008年7月30日（金）（8：10～17：00）

行程：学校～貝淵峠～黒沢～黒沢峠～元市野々地区～大銀杏の木～現在の飛泉寺～学校



② まとめ

実際に市野々に通じる黒沢峠を歩いてみると、とても市野々までは遠く、やっと着いたという達成感がありました。じんべを履くと石苔でも滑らず安心して歩けましたが、足が擦れて長距離となるとやはり大変だと思いました。実際には市野々は宿場とされていたのですが、旅人には今のようなおもてなしは出来なく、質素な食事や部屋の提供に過ぎなかったとお聞きしました。しかし、その連なる険しい峠道を越えてきた旅人には、おもてなし以上に市野々部落の生活の明かりから得る安堵感の方が大きかったのではないのでしょうか。



ダムの水が少ない夏季に限り市野々の農道が現われ、その道を歩くことができました。移動された大銀杏の木の跡地には大きなモニュメントが建設されており、民家があったであろう場所は、大きく土が盛り上がっていました。実際にその場に立ってみて、改めて調べていた村の面影を感じました。当時の建物は一切残されていないものの、資料からかつて存在した部落の姿を想像できました。三須さんにお話を伺いながら思いを馳せ、眺めたその光景に少し胸が締め付けられる思いがしました。

(5) 調査を終えて

今回の調査で市野々・下叶水という村のその時代その時代の暮らしを知り、またその時代の変化の中で翻弄されながらも順応していく人々の力強さというものを感ずることが出来ました。住んでいた土地は消えてしまいましたがこうして記録を残すことにより、部落の人々の思いは、これから先もずっと残っていくように思いました。

長い年月をかけて綴られた山村の年中行事には、今に通ずる箴言も秘められていることもわかりました。今回のような建設事業で消えていく村や町が数多くあると思いますが、その場所、その時代で創られた年中行事や伝承技術を「生きた証」としてその記録や資料をしっかりと残し、後世に伝えていく事が、今に生きる者としての勤めであることを私たちは強く感じました。

今回の調査にご協力を頂いた関係者の皆様 ありがとうございます。